

第4部会

なくなく、とりわけ中世の神秘主義的な靈性においてそれは顯著である。ある修道女が悔い改めをして、ヴィジョンを受け至福の状態へと達するまでの神秘的な道程が描出されている写本挿絵からは、当時のイメージに関する理論や実践をうかがうことができる。画像を通して見えるものから不可視なるものを体験してゆくという過程が巧妙に読み取れるが、そのような絵画は、メタ絵画（メタ宗教絵画）ということができるだろうか。絵画（画像、イメージ）そのものがテーマとなり、絵画とは何かということを再帰的に示している絵画、とくにそれが宗教絵画であれば、そのような画像をもとに、宗教における絵画の機能を分析することができると思われる。そこからさらに宗教美術の特色などを明確にすることも可能であろう。

マルグリット・ポレートに対する

異端審問について

村 上 寛

本発表はマルグリット・ポレート (Marguerite Porete) に対する異端判決について考察することを目的としている。ポレート及びその著作、『単純な魂の鏡 (Miroir des Simples Ames)』（以下『鏡』）は異端判決を受け火刑に処されたが、異端と指摘された十五箇所の内、その具体的内容が分かっている三つの内の二つの箇所について、その異端判決の根拠とポレートの真意を明らかにすることが本発表の目的である。

指摘された異端箇所の内、第一番目として示されているのは次のような文章である。

「滅却された魂は諸徳に別れを告げ、もはや諸徳に仕えない。というのも、そのような魂は使用するための諸徳を持たず、むしろ諸徳が（その魂の）意図に従うからである。」

これは諸徳の否定、それどころか何が徳であるかは魂の意図に応じて決まるという異端的な主張に思われるが、本当にそのような主張なのだろうか。

スコラ学の一般的理解によれば徳とは習慣・ハビトゥスであり、それによつて善を為さしめるところのものである。従つて「諸徳に別れを告げる」という言説は、それによつて善を為すところの根拠を捨て去ることに他ならない。徳とは仕える対象や使役する対象ではなく、魂自身の傾向性の問題であり、魂の意図に従うとか従わないといった対象となるものではないのである。

これに対してポレートが諸徳と見なしているのは人間本性に密接に関わるハビトゥスであるところの徳ではなく、世間一般において徳に適うと見なされるような、外的な規定によつて習慣的に為されている諸々の行為のことである。ポレートはそのような「習慣」を否定しつつも諸徳そのものは否定していない。すなわちポレートが「諸徳に別れを告げる」という言説で意図しているのは、外的に規定された習慣の否定であつて、徳そのものの否定ではないのである。神に由来する善いハビトゥスを持った魂であれば、その魂は必然的に徳に適う行為を為すはずである、とポレートは考えるのである。

次に取り上げる異端と指摘された箇所は、自然本性の問題に関わる箇所である。

「創造者の愛の内滅却された魂は、良心の呵責や後悔なしに、自然本性が求め、欲する如何なるものをも自然本性に与えることが出来るし、与えるべきである。」

ギョームをはじめとする審問官たちはこの引用文を、自然本性の無制限な肯定を認め、推奨しているものと見なし、異端箇所として指摘したと思われる。スコラ学の一般的理解によれば、人間は形相であるところの靈魂に基づいて種的に規定され、質料であるところの身体に基づいて個別化される。従って、何かを求めたり与えたりするような自然本性は、身体に関わる個体の自然本性であることになるが、理性の秩序を外れた欲情は反自然本性的な「肉の欲」と呼ばれるのである。

確かにポレートは自然本性という言葉で個体の自然本性、特に身体を意識しているが、必要性という概念においてある種の秩序付けを行っていたことは明らかである。「この自然本性は、この魂の意志が結び付けられた愛との結合の内変容されたために良く律せられており」、「必要な時を除いて、自分が欠いているものにかかずらうことがない」と言われているように、「必要性」という限定によって無制限な欲情が否定されているのである。「我々は理性の非難なしに、四大の奉仕を自然本性が必要とするあらゆる方法において受け取っています」と言われているように、個体の保全に必要な自然本性は理性ではなく愛の変容によって、必要性において秩序付けられ、肯定されているのである。

神を巡る意志に関わる異端箇所については機会を改めて検討したい。

シオランにおける無の位相と展開

藤 本 拓 也

エミール・シオラン（一九二一—一九九五）は、「無＝無いこと」に関わる語群を用いて、神や世界や存在について多くを語ってきた。何かが無いことが示されるために、無、虚無、空虚、空、空性などの語彙が動員され、あるいは非實在、非存在など否定辞による表現も目立つ。また無は、自己無化や自己放棄という動態として、あるいは喪失や不在や欠如という様態として表象される。ただし、シオランにおいて無という否定性は、必ずしも負的な価値付けをされているわけではない。とはいえ、否定を突き詰めることで、翻って超越を志向するといふ弁証法的動勢が見いだされるとは限らない。そのことが、無をめぐる思索においてシオランに特徴的な事柄である。本発表では、無の様々な位相を画定することを通じて、神を思惟の内に現成させようとするシオランの試みの一端を示した。

シオランがもつとも頻繁に引用する神秘家はエックハルトと十字架のヨハネであるが、二人の教説を読み替えた断章は、ともに、虚無と神との関わりを述べている。シオランは、十字架のヨハネの無執着と「神への欲求」とを人間の弱さ＝虚無と読